

〔原著〕

親和動機と攻撃性および社会的スキルが 友人関係満足感に及ぼす影響 —中学生の場合—

筑波大学教育研究科：塚本 貴文
筑波大学心理学系：濱口 佳和

The effects of affiliation motive, aggressiveness, and social skills
on the friendship satisfaction; in case of junior high school students

Takafumi Tsukamoto and Yoshikazu Hamaguchi

【問題と目的】

子どもにとって友人関係とは、家族以外の他人者と初めて結ぶ社会的関係であり、社会的適応にとって必要な知識や技能、行動様式を学ぶ社会的学習の機会を提供する場でもある。友人関係において、長期にわたって仲間から拒否されたり、孤立したりすることは、子どもの精神的健康に大きく否定的な影響を及ぼすだけでなく、社会的スキルの学習や社会的コンピテンスの発達を阻害する (Asher & Parker, 1989)。

一方、子どもにとって友人関係は、ストレッサーとしても機能することが明らかにされている (岡安・嶋田・神村・山野・坂野, 1992)。これは、仮に外見的には良好な友人関係を築いているように見えても、その関係を維持するために内心ストレスを感じている子どもが少なからずいる可能性を示唆している。このように考えるならば、子どもにとって「望ましい」仲間関係とは、単に孤立や被排斥という外的な状態によって規定されるものではなく、子ども自身がその人間関係に満足しているという内的な状態によっても規定される必要があろう。

山本・仲田・小林 (2000) は、このような友人関係への満足感を、「互いに好意を持ち合っている」と思っている、2人の関係はうまくいっていると思っている、相手の自分への態度に満

足している、といったものとしてとらえている。良好な友人関係を持つことができ、その関係に満足しているという状態は、仲間関係における適応、ひいては学校適応には必要なことである。そこで本研究では、友人関係満足感を仲間関係の適応の指標とし、これに関連する諸要因を明らかにすることを目的とする。

良好な友人関係を形成、維持していく上で重要な要因の1つであり、友人関係満足感に対して正の影響を与える要因として、親和動機が挙げられる。親和動機とは、速水 (1999) によると、他の人と友好的な関係を成立させ、それを維持したいという社会的動機のことである。しかし、子どもの親和動機について扱った研究はあまり見られず、成人を対象とした研究がほとんどである。そのような中で、杉浦 (2000) の研究は数少ない例外である。彼は親和動機に2つの側面があるという先行研究 (Sipley & Veroff, 1952; Atkinson, Heynes & Veroff, 1954) にしたがって親和動機を測定する尺度を作成し、中学生、高校生、大学生について、親和動機と対人的疎外感との関係を調べている。

青年を対象とした榎本 (2000) の研究では、友人と親しくしたいという欲求が友人と活動を引き起こすことが明らかにされている。したがって、親和動機が高い子どもは、他者に対して積極的、友好的に関わり、その結果、良好な

友人関係を築くことに成功し、満足感が高まると思われる。よって、親和動機は友人関係満足感に正の影響を与えると予想される。

親和動機とは逆に、友人関係満足感に対して、負の影響を及ぼす要因の一つとして、子ども自身の持つ攻撃性が挙げられる。攻撃性研究は数多くなされており、攻撃の定義も人によって異なった意味で用いられることがあるが（山崎, 2002）、本研究では、秦（1990）にしたがって、攻撃を、「他者に対して何らかの危害を与えることを意図した行動」という敵意的攻撃の意味で用いることとし、そのような行動をおこしやすい人格特性を攻撃性とする。

最近20年間の児童の仲間関係の適応と攻撃性についての研究は、主にソシオメトリック・テストによる地位類型間の比較を中心に進められてきた（向井・神村, 1998）。これらの研究では、攻撃的な児童は、仲間から拒否されやすいことが繰り返し報告されてきた（Coie, Dodge & Coppotelli, 1982；Dodge, Coie & Brakke, 1982；前田, 1995；前田, 2002）。また、攻撃的児童は、特に仲間入り場面や挑発場面で、社会的規範に従って適切に振る舞えないことが指摘されており（Volling, MacKinnon-Lewis, Rabiner, & Baradaran, 1993），その背景に社会的情報処理の問題があることが明らかにされてきた（Crick & Dodge, 1994；濱口, 2002；中澤, 1992）。

さらに、攻撃性の高い子どもは、非行を犯す可能性があることや、学業不振や、抑うつ症状など、広範な適応の問題が見られることが明らかにされている。例えば、Kupersmidt & Coie（1990）は、各学級内で他の85%以上の児童から攻撃的とみなされていた児童を攻撃児童とし、7年間の追跡調査によって、全般的に攻撃性が高かった児童と仲間に對して攻撃的であった児童は、警察沙汰や裁判沙汰といった深刻な非行に結びついていたことを明らかにした。また、Morison & Masten（1991）は、縦断的研究によつて、児童期においては攻撃性と学力の間に関連が見られなかつたのに、思春期には両者の間に関連が現れたことから、攻撃的・崩壊的行動

が長期継続するにつれ、学業面の不振が攻撃的行動の継続や悪化につながる可能性を示唆している。さらに、Panak & Garber（1992）は、小学校3年生から5年生までの児童を1年間追跡し、攻撃的であることが級友からの排斥につながり、それがさらに抑うつ感の増大に結びついていたことを明らかにしている。

以上のように、攻撃的な子どもは、さまざまな社会的不適応との関連を示すことが明らかにされている。これらの結果を踏まえると、攻撃性の高い子どもは、友人への行動が攻撃的になりやすく、そのため友人からの排斥を招き、否定的な友人関係の持続により、友人関係の満足感が低くなると思われる。したがって、攻撃性は、友人関係満足感に対して負の影響を与えると思われる。

親和動機ならびに攻撃性と、対人関係・友人関係満足感との関連について述べてきたが、さらに親和動機や攻撃性と深い関連がある要因として、社会的スキルが挙げられる。社会的スキルとは、「対人場面において相手に適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的、非言語的な対人行動」であると定義されている（相川, 1999）。嘉数・前原・金城（1991）によると、親和動機が高い子どもは社会的スキルの数が多く、多様な社会的対応のレパートリーを持っていることが示唆されている。また、先に紹介した先行研究の諸結果から、攻撃的な子どもたちは、社会的スキルが欠如しがちであることが示唆されている。以上のように、親和動機と攻撃性は社会的スキルとの間に、親和動機とは正の、攻撃性とは負の関連があることが予想される。

また、社会的スキルの有無は、他者からの受容と拒否に関連があるため、結果として、個人の心理的適応とも関連が見られる。例えば、今津（1998）は、社会的スキルの欠如が抑うつに對して影響を与えていることを示している。また、嶋田・戸ヶ崎・三浦（1997）は、攻撃的言動または引っ込み思案行動が顕著で、しかも社会的スキルが欠如しているために、ストレス反応が高い中学生4名に対して個別の社会的スキル訓練を行った結果、いずれの中学生に対して

も社会的スキル訓練による、ストレス反応の低減が認められたと報告している。以上のことから、社会的スキルは友人関係満足感とも関連があることが予想される。

このように、親和動機と攻撃性が友人関係満足感に与える影響を考える時には、社会的スキルについても、検討する必要があると思われる。人格特性である親和動機と攻撃性は、直接友人関係満足感に影響を与えていているのではなく、行動として現れる社会的スキルを通して影響をあたえていると考えられる。つまり、親和動機・攻撃性(それぞれ正・負の影響)→社会的スキル→友人関係満足感といった関連性が考えられる。

以上に述べたように、本研究では、親和動機ならびに攻撃性が、社会的スキルを媒介として友人関係満足感に対して及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

【方 法】

1. 調査対象者

G県内の公立中学校1年生101名（男子59名、女子42名）、2年生97名（男子51名、女子46名）、3年生106名（男子52名、女子54名）、無記入2名の計306名に対して質問紙調査を行った。

2. 調査内容

①親和動機の測定

親和動機を測定するために、杉浦（2000）による親和動機尺度18項目を用いた。この尺度は、「親和傾向」・「拒否不安」からなる2因子構造を持ち、「あてはまる」から「あてはまらない」の5件法で回答を求めた。

②攻撃性の測定

攻撃性を測定するために、秦（1990）による敵意的攻撃インベントリーを用いた。原尺度は64項目と項目数が多いため、「身体的暴力」、「敵意」、「いらだち」、「言語的攻撃」、「間接的攻撃」の各因子から、因子負荷量の高い順に各因子6項目ずつ、全体で30項目を抜粋したものを用いた。「そうだ」から「ちがう」の5件法で回答を求めた。

③社会的スキルの測定

社会的スキルを測定するために、戸ヶ崎・岡安・坂野（1997）による「中学生用社会的スキル尺度」の中から、「関係参加」ならびに「関係向上」因子の項目のみ抜粋したもの用いた。「ぜんぜんそうでない」から「いつもそうだ」の4件法で回答を求めた。

④友人関係満足感の測定

友人関係満足感を測定するために、山本他（2000）の友人関係認知尺度の4項目と独自に作製した1項目を加えた5項目を用いた。各項目と回答形式（5件法）を下記に示す（①～④は山本他の項目⑤は第一著者のオリジナル）。

①「あなたは、あなたの友だちと気が合うに楽しく活動できていますか」（「大変うまくいっている」～「うまくいっていない」）

②「あなたに対する友だちの態度を、どのように感じますか」

（「とてもよい」～「よくない」）

③「あなたは、友だちをどう思っていますか」（「とても好きだ」～「好きでない」）

④「あなたは、友だちがあなたのことをどう思っていると感じますか」（「とても好きだと思っている」～「好きでないと思っている」）

⑤「あなたは、今の友だちとの関係に満足していますか」（「とても満足している」～「満足していない」）

なお、この尺度では、友人を普段自由な時間に一緒にいる友だち、と想定して回答してもらった。

【結 果】

1. 各尺度の因子分析と信頼性

〈親和動機尺度〉

全18項目に対し、因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行ったところ、原尺度どおりの2因子構造が得られたので（Table 1），杉浦（2000）にしたがって、第1因子9項目を「親和傾向」、第2因子9項目を「拒否不安」とした。これらの各因子、全項目に対して、Cronbach

Table 1 親和動機尺度の各項目と因子負荷量（主因子法・バリマックス回転）

番号	質問項目	因子負荷量		
		因子I	因子II	共通性
I：親和傾向				
13	人と深く知り合いたい	0.737	0.179	0.576
14	友達と喜びや悲しみを共有したい	0.736	0.257	0.607
16	できるだけ多くの友達を作りたい	0.697	0.231	0.539
17	友達と非常に親密になりたい	0.693	0.291	0.565
12	友達には自分の考えていることを伝えたい	0.682	0.201	0.506
15	知り合いが増えるのが楽しい	0.675	0.179	0.488
11	友人とは本音で話せる関係でいたい	0.663	0.199	0.479
18	一人でいるよりも人と一緒にいたい	0.650	0.359	0.552
10	人とつきあうのが好きだ	0.577	0.192	0.370
II：拒否不安				
5	誰からも嫌われたくない	0.264	0.744	0.622
3	できるだけ敵は作りたくない	0.296	0.644	0.503
7	仲間外れにされたたくない	0.334	0.638	0.518
4	友だちと対立しないように注意している	0.113	0.598	0.370
8	一人でいることで変わった人と思われたくない	0.241	0.587	0.402
2	どんなときでも相手の機嫌を損ねたくない	0.200	0.561	0.354
6	みんなと違うことはしたくない	0.036	0.560	0.315
9	一人ぼっちでいたくない	0.379	0.538	0.433
1	仲間から浮いているように見られたくない	0.249	0.490	0.302
固有値		4.753	3.748	
寄与率 (%)		26.403	20.823	
累積寄与率 (%)		26.403	47.226	

の α 係数を求めたところ、第1因子.91、第2因子.86、全体で.91であり、十分な信頼性が確認された。

〈敵意的攻撃インベントリー〉

全30項目に対し、因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った（Table 2）。

最終的な因子分析の結果、原尺度における「間接的攻撃」の項目が分散し、「間接的攻撃」因子が消失したが、それ以外はほぼ原尺度どおりの因子構造が得られ、回転後の解釈可能性から4因子解を採用し、第1因子を「いらだち」、第2因子を「身体的暴力」、第3因子を「敵意」、第4因子を「言語的攻撃」とした。因子ごとに尺度化し、Cronbach の α 係数を求めたところ、第1因子.78、第2因子.76、第3因子.60、第4因子.68となった。また第1因子～第4因子の構成項目となった項目全体で尺度を構成したところ、 α 係数は.76であった。以上のことから、尺度の

信頼性はほぼ確認されたと言えよう。

〈社会的スキル尺度〉

全18項目に対して、因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行ったところ、原尺度どおりの2因子構造が得られたので、原尺度にしたがって、第1因子8項目を「関係参加」、第2因子10項目を「関係向上」とした（Table 3）。これらの各因子、全項目に対して、Cronbach の α 係数を求めたところ、第1因子.74、第2因子.84、全体.82であり、十分な信頼性が確認された。

〈友人関係満足感尺度〉

全5項目に対して因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った結果、1因子が抽出され、すべての項目が高い因子負荷量を示した。Cronbach の α 係数を求めたところ、.85となり、尺度の信頼性が確認された。

Table 2 敵意的攻撃インベントリーの各項目と因子負荷量（主因子法・プロマックス回転）

番号	質問項目	因子負荷量				
		因子I	因子II	因子III	因子IV	共通性
I : いらだち						
23 私は、すぐに機嫌が悪くなる	0.734	-0.191	0.221	-0.072	0.625	
3 私は、よくイライラする	0.680	-0.058	-0.044	0.111	0.425	
28 私は、ちょっとしたことすぐふくれたり、すねたりすることがある	0.630	-0.016	0.069	-0.089	0.411	
13 私は、ささいなことでイライラすることはない*	0.629	-0.024	0.024	-0.004	0.507	
8 私は、物事がうまくいかないと、気持がイライラして、すぐ人にあたる	0.605	0.100	-0.158	-0.026	0.372	
18 私は、気が短いほうである	0.570	0.150	0.034	0.027	0.416	
II : 身体的暴力						
1 私は、思わず暴力を振るってしまうことが時々ある	0.008	0.770	-0.091	0.046	0.598	
11 私は、腹を立て、人をけったことがある	-0.079	0.633	0.107	0.032	0.389	
21 私は、どんなに腹がたっても、誰かをたたくようなことはしない*	-0.009	0.601	0.093	-0.050	0.433	
6 私は、ちょっとしたことで、思わずひどく怒って乱暴してしまうことがある	0.341	0.540	-0.128	0.072	0.591	
16 私は、ほかの人と一緒にになって、人をたたいたことがある	-0.072	0.538	0.067	-0.203	0.313	
26 私は、相手がどうしても言うことを聞かないときは、こづいたりすることがある	0.008	0.374	0.120	0.087	0.299	
III : 敵意						
2 私は、憎らしいと思う人はほとんどいない*	-0.099	0.054	0.639	0.110	0.405	
12 私のまわりには、気にいらない人が多い	0.091	-0.046	0.600	0.068	0.467	
17 私のまわりには、いなくなった方が良いと思う人がいる	0.018	0.098	0.493	-0.091	0.293	
IV : 言語的攻撃						
9 私は、言い合いをするとかんたんに負かされてしまう*	-0.159	-0.041	0.088	0.728	0.547	
4 私は、口では負けない	0.156	-0.005	-0.038	0.720	0.573	
*は逆転項目		I	II	III	IV	
	I	1.000				
	II	0.433	1.000			
	III	0.340	0.132	1.000		
	IV	0.094	0.040	0.049	1.000	

2. 各尺度の性差・学年差

各尺度における性差・学年差を調べるために、各尺度を従属変数として、性別(男・女)×学年(1年・2年・3年)の2要因分散分析を行った(Table 4)。

性別の主効果が有意であったのは、親和動機のうちの「親和傾向」[$F(1,290) = 19.57$, $p < .01$], 「拒否不安」[$F(1,291) = 8.37$, $p < .01$], 攻撃性のうちの「いらだち」[$F(1,290) = 13.15$, $p < .01$], 「身体的暴力」[$F(1,292) = 34.62$, $p < .01$], 「言語的攻撃」[$F(1,290) = 12.79$,

$p < .01$]), 社会的スキルのうちの「関係参加」[$F(1,288) = 6.30$, $p < .05$], 「関係向上」[$F(1,290) = 12.85$, $p < .01$], 「友人関係満足感」[$F(1,302) = 6.84$, $p < .01$]であった。「身体的暴力」のみ、女子より男子が高く、「いらだち」・「言語的攻撃」・「拒否不安」・「親和傾向」・「関係参加」・「関係向上」・「友人関係満足感」は男子より女子が有意に高かった。

以上の結果より、ほぼ一貫して性別の影響が考えられるので、以降の分析については、男女別に行った。

Table 3 社会的スキル尺度の各項目と因子負荷量（主因子法・バリマックス回転）

番号	質問項目	因子負荷量		
		因子I	因子II	共通性
I : 関係参加				
13	遊んでいる友だちの中に入れない*	0.799	0.077	0.644
4	友だちに話しかけられない（話しかけることが難しい）*	0.701	0.072	0.496
17	友だちと離れて、一人で遊ぶ*	0.684	0.116	0.481
7	自分から友だちの仲間に入れない*	0.663	0.125	0.456
9	友だちの遊びをじっと見ている*	0.571	0.019	0.327
11	休み時間に友だちとおしゃべりをしない*	0.571	0.030	0.327
18	友だちに気軽に話しかける	0.548	0.268	0.372
15	なやみごとを友達に相談できない*	0.496	0.153	0.270
II : 関係向上				
6	友だちのたのみを聞く	0.105	0.635	0.414
5	友だちが失敗したら、ほげましてあげる	0.136	0.579	0.353
10	友だちがよくしてくれたときは、お礼を言う	0.191	0.501	0.287
2	友だちの話をおもしろそうに聞く	0.086	0.475	0.233
3	自分に親切にしてくれる友だちは、親切にしてあげる	0.241	0.455	0.265
1	困っている友達を助けてあげる	0.069	0.449	0.207
12	引き受けたことは、最後までやり通す	0.050	0.440	0.196
16	あいての気持ちを考えて話す	0.090	0.419	0.184
14	友だちの意見に反対するときは、きちんとその理由を言う	- 0.031	0.376	0.142
8	友だちのけんかをうまくやめさせる	- 0.001	0.373	0.139
固有値		3.383	2.409	
寄与率 (%)		18.797	13.383	
累積寄与率 (%)		18.797	32.180	

*は逆転項目

Table 4 各尺度の学年・性別ごとの平均値、標準偏差、F値、自由度

	平均						標準偏差						F値	
	1年		2年		3年		1年		2年		3年		学年	性別
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
親和動機														
親和傾向	31.67	36.08	33.52	36.36	32.75	37.00	8.05	6.95	7.17	7.82	7.44	7.12	0.61	19.57**
拒否不安	30.70	34.30	31.85	33.76	31.18	32.69	7.02	6.88	6.17	6.97	5.66	8.03	0.41	8.37**
攻撃性														
いらだち	16.65	18.81	17.52	18.85	16.47	19.17	5.56	4.15	4.78	4.95	4.04	5.01	0.23	13.15**
身体的暴力	17.82	14.10	18.69	14.30	16.90	14.70	4.93	4.96	4.52	5.48	4.49	5.41	0.51	34.62**
敵意	8.19	8.78	9.02	9.57	8.69	9.09	2.97	2.86	2.75	3.16	2.92	2.73	2.04	1.18**
言語的攻撃	5.98	7.00	5.76	6.48	5.41	6.20	1.98	2.25	1.90	2.04	1.38	2.32	2.90	12.79**
社会的スキル														
関係参加	25.50	26.21	23.63	26.00	24.57	25.41	4.35	4.08	4.78	3.60	4.33	4.84	1.49	6.30**
関係向上	28.35	30.01	29.00	30.26	28.10	29.98	4.81	4.01	3.87	3.36	3.32	3.06	0.60	12.85**
友人関係満足感	19.42	20.67	19.16	19.93	19.79	20.98	3.37	3.57	3.43	3.67	3.91	3.31	1.42	6.84**

3. 親和動機、攻撃性、社会的スキルが友人関係満足感に与える影響

親和動機、攻撃性が社会的スキルを媒介として友人関係満足感に与える影響を検討するため、パス解析を行った。はじめに、親和動機（「親和傾向」・「拒否不安」）と攻撃性（「いらだち」・「身体的暴力」・「敵意」・「言語的攻撃」）の各因子得点を説明変数、社会的スキル（「関係参加」・「関係向上」）の各因子得点を目的変数として、続いて、親和動機と攻撃性と社会的スキルの各因子得点を説明変数、友人関係満足感を目的変数として、順次、重回帰分析を行った。

男子では、「関係参加」に対して、「親和傾向」から有意な正のパス ($\beta = .333, p < .01$) が、「いらだち」から有意な負のパス ($\beta = -.196, p < .05$) が見られた。「関係向上」に対しては、「親和傾向」ならびに「言語的攻撃」から有意な正のパス ($\beta = .460, p < .01$; $\beta = .164, p < .05$) が、「いらだち」から有意な負のパス ($\beta = -.151, p < .05$) が見られた。「友人関係満足感」に対しては、「親和傾向」ならびに「関係参加」から有意な正のパス ($\beta = .173, p < .05$; $\beta = .458, p < .01$) が、「いらだち」から有意な負のパス ($\beta = -.144, p < .05$) が見られた。この結果をFigure. 1に示す。

女子では、「関係参加」に対して、「親和傾向」から有意な正のパス ($\beta = .427, p < .01$) が、「拒否不安」から有意な負のパス ($\beta = -.255, p < .05$) が見られた。「関係向上」に対して、

「親和傾向」ならびに「言語的攻撃」から有意な正のパス ($\beta = .272, p < .01$; $\beta = .226, p < .01$) が、「敵意」から有意な負のパス ($\beta = -.256, p < .01$) が見られた。「友人関係満足感」に対して、「親和傾向」ならびに「関係参加」から有意な正のパス ($\beta = .219, p < .01$; $\beta = .369, p < .01$) が見られた。この結果をFigure. 2に示す。

【考察】

本研究では、親和動機と攻撃性を人格特性レベルでの要因、社会的スキルを行動レベルでの要因ととらえて、親和動機、攻撃性、社会的スキルが、具体的にどのように友人関係満足感に對して影響を与えているのかをパス解析により検討した。

まず、男女ともに、親和動機のうちの「親和傾向」が社会的スキルのうちの「関係参加スキル」を媒介して、友人関係満足感に對して正の影響を与えていた。これは、他者と親しくなりたいという気持ちを持つほど、積極的に友人に関わるためのスキルの獲得・遂行が促され、その結果友人関係満足感が高まることを意味するものである。これは当初想定したとおりの関連を示すものである。

「親和傾向」は友人関係満足感に、直接的にも影響を与えていた。親和傾向の強い者は、「人と深く知り合いたい」「喜びや悲しみを共有した

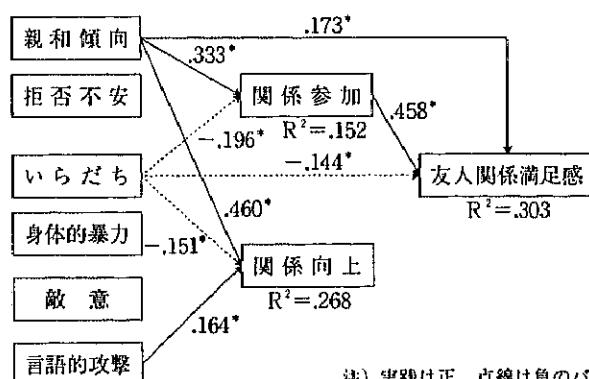
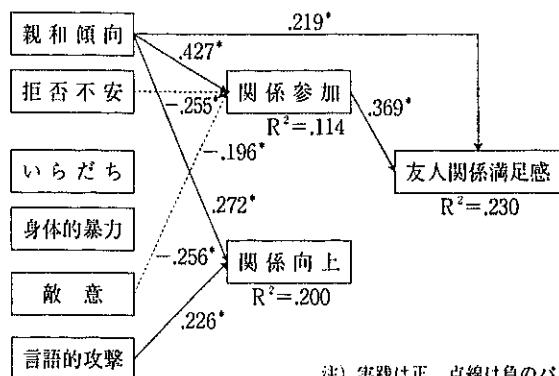


Figure 1 男子におけるパス図



注) 実践は正、点線は負のパスを表す

Figure 2 女子におけるパス図

い」など、相手との深い親密な人間関係を築くこと自体を重視している。そのため、友人とのつき合いの中で相手から信頼されたり、感謝されたりすることが、結果として多くなり、相手からも相応の返報を受けるため、結果として友人関係満足感が高まるということが考えられる。また、親和傾向の高い者は、仲間として自分同様に親密な関係を大事にする者を相手として選ぶかもしれない。そのような相手であれば、やはり親密な友人関係を作りやすく、結果として自分も少なからず満足を得ることができるであろう。親和傾向と友人関係満足感の関連は、以上のように、「親和的な友人の選択」や「友人からの返報」といった、ここでは取り上げられなかった媒介的な要因の作用によりもたらされたものと考えられるが、これはあくまでも推測の域を出ておらず、今後さらに実証的に検討する必要がある。

ところで、男女とも、関係参加スキルは友人関係満足感に比較的強い関連を示したのに対して、関係向上スキルが何の関連も示さなかつたことは注目に値する。「関係参加スキル」は、積極的に仲間関係の中に入り、構築して行く上で必要な社会的スキルである。一方「関係向上スキル」は、周囲に合わせたり、相手に親切に振舞うという愛他的な社会的スキルである。主張的なスキルに長けていることは、人間関係をある程度自分の思うようにリードしていく可能性が高く、その結果、友人関係満足感が高まり

やすいことは想像に難くない。一方、「関係向上スキル」は、相手に対する向社会的行動を中心のスキルであり、これを多く行う者は、相手に奉仕することが多くなることを意味する。このような場合、同程度かそれ以上に相手からの返報がないと、友人関係への満足感にはつながりにくいであろう。つまり「関係向上スキル」は、高いからといって直ちに友人関係の満足感が高まるというものではなく、それが「相手の返報」によって報いられることで始めて友人関係満足感につながるものと考えられる。本研究の結果は、自分にとって満足のゆく友人関係を構築していくためには、こうした「関係向上スキル」ではなく、むしろ主張的な「関係参加スキル」を高めることの方が有効であることを示すものと言えるだろう。

また、攻撃性のうちの「言語的攻撃」が社会的スキルの「関係向上」に弱いながらも正の影響を与えていた。「言語的攻撃」は、ここでは「言い合いになったとき、口では負けない」といった項目から成り立っており、「攻撃」というよりもむしろ「言葉による防衛」とも言える内容である。こうした言葉による防衛も、他者と関わる中で發揮される社会的スキルのひとつと考えられる。一方、関係向上スキルは愛他的な仕方で他者と関わるスキルである。ともに言語的なかかわりの巧みさという点で共通する部分が見られる。両者間の正の低い相関は、このような類似性によるものと考えられる。

また、男女で異なった結果が見られた。まず、攻撃性と社会的スキルの関連では、男子の場合は「いらだち」が「関係参加」と「関係向上」の2つの社会的スキルに対して低い負の相関を示したのにに対して、女子の場合は「敵意」が関係参加のみに、やはり低い負の相関を示した。榎本（1999）によると、中学生の男子の友人関係は、女子に比べると、遊びやゲームやスポーツなどの活動を共有する行動が多く、一方、女子は男子より、親密さを確認しあう行動や閉鎖的な行動が多いという。中学生男子が友人と交流する文脈は、遊びやゲームの場であることが多いと推察されるが、この場面では、子どもは一定のルールに従って、勝ち負けを争う競争的な遊戯に参加し、互いに楽しむことが求められる。こうした事態は感情や行動の自己調整能力がある程度育っている子供でないと対処困難と考えられる。「いらだち」はこうした自己調整とは相反するもので、こうした場面に参加する際の行動にも、この場面での他者との友好的なやり取りにも、妨害的に作用するものと考えられる。特に男子では「いらだち」が2つの社会的スキルと負の相関を示した理由は、以上のように推察できる。

一方、中学生女子の友人関係は、親密さの相互確認や、排他的・閉鎖的な友人関係への没入といった特徴が見られる、こうした友人関係への参加は、「気に入らない人が多い」など周囲の仲間にに対する敵意が強い状態では当然困難となる。特に女子で「敵意」が「関係参加」スキルに負のパスを示したのは以上の理由によるものと思われる。」

また、興味深い点として、女子の場合、親和動機の「拒否不安」が「関係参加スキル」に負の影響を与えていることである。これは、中学生女子の場合、他者から拒否されたくないという気持ちを強く持つことが、関係参加スキルの獲得・遂行を阻んでいることを意味している。中学生女子の友人関係は、特に緊密性が強く、閉鎖的であるので、一度でも仲間のグループから外れた場合に、そのグループに戻ることが難しくなる。そのため、拒否されることに過度の不

安を抱き、その不安から、かえって友人関係に参加する行動をうまくとることができない、といったことが考えられる。友人関係への参加行動が取れない結果、友人との交流経験が不足し、友人関係に満足感が得られなくなるものと思われる。

【まとめと今後の課題】

以上をまとめると中学生の友人関係満足度には、以下の諸要因が関与することが明らかになった。
 ①社会的スキルのうちの「関係参加スキル」が比較的高い正の関連を示す。
 ②親和動機のうちの「親和傾向」は直接的に、または関係参加スキルを媒介にして、友人関係満足感に正の関連を示す。
 ③男子では、攻撃性の「いらだち」が、直接または社会的スキルの「関係参加」を媒介して、友人関係満足度に負の関連を示す。
 ④女子では、攻撃性の「敵意」と親和動機の「拒否不安」が社会的スキルの「関係参加」を媒介して、友人関係満足感に負の影響を示す。

以上の結果を踏まえて、友人関係に不満をもつ中学生を援助するための留意点について述べると下記のとおりになるであろう。

①親和動機について：男女とも、「親和傾向」を高めることがまず必要である。ただし、本研究で取り上げられた「親和傾向」は、単に「仲良くしたい」、「一緒に行動したい」といった外面向的な結びつきを求める傾向を意味するのでなく、「人と深く知り合いたい」、「喜びや悲しみの感情を共有したい」、「本音で話せる関係になりたい」といった、精神的に深い、親密なつながりを求める傾向であったことに留意するべきである。これは榎本（1999）の言う「相互理解活動」に該当する行動で、中学から高校・大学にかけて増加する友人関係行動である。したがって、こうした「相互理解活動」に特化された親和動機を高めるという発達促進的な働きかけを行うことが重要である。また、女子においては「拒否不安」を低減させることもあわせて重要である。

②攻撃性について：男子では攻撃性の「いら

だち」を、女子では「敵意」を低減することが重要である。「いらだち」は「少しのことでもイライラする」などの傾向を指す。これを減少させるためには、Goldstein, Glick, & Gibbs (1998) の攻撃置換訓練のうち、怒りコントロール訓練 (anger control training) の適用が効果的であろう。一方女子の「敵意」は、「私の周りには気に入らない人が多い」という認知を指している。こうした敵意的な認知の変容には、Hudley & Graham (1993) のような敵意帰属修正プログラムの適用が考えられる。

③社会的スキルについて：男女とも、社会的スキルは「関係参加スキル」を高めることが重要である。これは「気軽に仲間に話しかける」などの、肯定的な社会的なやり取りの始発に関わるスキルで、仲間との社交的な会話や遊びを開始しリードする機能を持つものである。友人関係で満足感を得るために、援助的・向社会的なスキルよりも、積極的・主張的なスキルの獲得が重要である。このためには、主張的スキルに焦点化した社会的スキルの適用が効果的であろう。ただし、①の「親和傾向」が高まることによっても、②の攻撃性が低下することによっても、関係参加スキルは多少なりとも改善されることも期待できる。

以上のように、友人関係に満足が得られず、不適応に陥っている子どもたちに対する援助には、主張行動を中心とした社会的スキルトレーニングが有効なことが示唆された。しかし、社会的スキルに対しては、親和動機や攻撃性も無視できない影響を与えていることから、社会的スキル訓練のみならず、親和動機と攻撃性の改善を目指す介入を併用することで、より大きな効果が得られと思われる。ただし、攻撃性と親和動機は、社会的スキルや友人関係満足感に及ぼす影響のあり方が、男女で異なるので、生徒の性別に応じた総合的な介入プログラムの立案が望まれる。

引用文献

相川充 1999 社会的スキル 中嶋義明・安藤

- 清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・立花政夫・箱田祐司(編) 心理学辞典 有斐閣
- Asher, S. R., & Parker, J. G. 1989 Significance of peer relationship problems in childhood. In B. H. Schneider, G. Atteli, J. Nadel & R. P. Weissberg (Eds.), *Social competence in developmental perspective*. Pp. 5-23 Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Atkinson, J. W., Heyns, R. W., & Veroff, J. 1954 The effect of experimental arousal of the affiliation motives on thematic apperception. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **49**, 405-410.
- Coie, J. D., Dodge, K. A., & Coppotelli, H. 1982 Dimensions of social status: A cross-aged perspective. *Developmental Psychology*, **18**, 557-570.
- Crick, N. & Dodge, K. A. 1994 A review and reformulation of social information processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, **115**, 74-101.
- Dodge, K. A., Coie, J. D., & Brakke, N. P. 1982 Behavior patterns of socially rejected and neglected preadolescents: The role of social approach and aggression. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **10**, 389-410.
- 榎本淳子 1999 青年期における友人と活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, **47**, 180-190.
- 榎本淳子 2000 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, **48**, 444-453.
- Goldstein, A. P., Glick, B. & Gibbs, J. C. 1998 *Aggression replacement training (Revised edition): A comprehensive intervention for aggressive youth*. Champaign, Illinois: Research Press.
- 濱口佳和 2002 攻撃性と情報処理 山崎勝之・島井哲(編)『攻撃性の行動科学 発達・教育編』, 2002, ナカニシヤ出版, Pp. 40-59.
- 秦一士 1990 敵意的攻撃インベントリーの作成 心理学研究, **61**, 227-234.

- 速水敏彦 1999 親和動機 中嶋義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・立花政夫・箱田祐司（編） 心理学辞典 有斐閣
- Hudley, C., & Graham, S. 1993 An attributional intervention to reduce peer-directed aggression among African-American boys. *Child Development*, 64, 124-138.
- 今津芳江 1998 社会的スキルの欠如が抑うつに及ぼす影響—女子中学生を対象とした場合— 日心62回大会論文集, 922.
- 嘉数朝子・前原武子・金城洋子 1991 児童の社会的問題解決能力—社会測定的地位や親和動機づけとの関係— 琉球大学教育学部紀要第二部, 38, 339-346.
- Kupersmidt, J. B. & Coie, J. D. 1990 Preadolescent peer status, aggression, and school adjustment as predictors of externalizing problems in adolescence. *Child Development*, 61, 1350-1362.
- 前田健一 1995 児童期の仲間関係と孤独感—攻撃性、引っ込み思案、および社会的コンピタンスに関する仲間知覚と自己知覚— 教育心理学研究, 43, 156-166.
- 前田健一 2002 攻撃性と仲間関係 山崎勝之・島井哲志（編）『攻撃性の行動科学 発達・教育編』, 2002, ナカニシヤ出版, Pp. 122-134.
- Morison, P. & Masten, A. S. 1991 Peer reputation in middle childhood as a predictor of adaptation in adolescence: A seven-year follow-up. *Child Development*, 62, 991-1007.
- 向井隆代・神村栄一 1998 子どもの攻撃性といじめ—発達心理学的視点による基礎研究— カウンセリング研究, 31, 72-81.
- 中澤潤 1992 社会的問題解決における情報処理過程と子どもの適応 千葉大学教育学部研究紀要（第一部）, 40, 263-290.
- 岡安孝宏・鳴田洋徳・神村栄一・山野美樹・坂野雄二 1992 心理的ストレスに関する調査研究の最近の動向：教育場面におけるストレッサーの測定を中心として 早稲田大学人間科学研究, 5, 149-158.
- Panak, W. F. & Garber, J. 1992 Role of aggression, rejection and attributions in the prediction of depression in children. *Development and Psychopathology*, 4, 145-165.
- 鳴田洋徳・戸ヶ崎泰子・三浦正江 1997 社会的スキル訓練が心理的ストレス反応に及ぼす影響 日本行動療法学会第23回大会論文集, 153-154.
- Sibley, T. E. Jr., & Veroff, J. 1952 A projective measure of need for affiliation. *Journal of Experimental Psychology*, 43, 349-356.
- 杉浦健 2000 2つの親和動機と対人的疎外感との関係—その発達的变化— 教育心理学研究, 48, 352-360.
- 戸ヶ崎恭子・岡安孝弘・坂野雄二 1997 中学生の社会的スキルと学校ストレスとの関連 健康心理学研究, 10, 23-32.
- Volling, B. L., MacKinnon-Lewis, C., Rabiner, D. & Baradaran, L. P. 1993 Children's social competence and sociometric status: Further exploration of aggression, social withdrawal, and peer rejection. *Development & Psychology*, 4, 459-483.
- 山本淳子・仲田洋子・小林正幸 2000 子どもの友人関係認知および教師関係認知とストレス反応との関連—学校不適応予防の視点から— カウンセリング研究, 33, 235-248.
- 山崎勝之 2002 発達と教育領域における攻撃性の概念と測定方法 山崎勝之・島井哲志（編著）『攻撃性の行動科学』, ナカニシヤ出版, Pp. 19-37.